

# YMCA NEWS

# 11

■ホームページ  
www.kumamoto-ymca.or.jp  
■ブログ  
kumamoto-ymca.wablog.com  
■メールマガジン登録  
www.kumamoto-ymca.or.jp/cgi-bin/mail/mail.cgi



●発行所/（株）熊本YMCA / 〒860-8739 熊本市新町1-3-8 TEL.096-353-6397代  
●編集人/ 神保勝巳 ●発行人/ 堀 弘雄 2009年11月1日発行（毎月1日発行）  
1984年8月15日第3種郵便物認可 定価60円（送料60円）

THE YOUNG MEN'S CHRISTIAN ASSOCIATION

## JOCS切手運動45周年 命を支えてく切手1枚から見える世界

社団法人日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）は、クリスチャン医療従事者による「日本キリスト者医科連盟」を母団体に、1960年に日本のNGOの草分けとして創立。使用済み切手運動は今年45周年を迎え、アジア・アフリカにおける保健医療協力は来年50周年を迎えます。今回は、地域に根差した活動現場から見える人々の現実や世界、そして使用済み切手運動の面白さや意味について、JOCS総主事の大江浩さんにお話しいただきました。



私は神戸及び横浜YMCAでの計26年間を経て、JOCSで働き与えられて4年目となります。YMCAでは、「人に仕えること・人と共に歩むこと」の大切さを教えられました。阪神大震災は「命」の尊さとボランティアの力を痛感し、生き方と価値観を大きく変えられる契機となりました。

JOCSの原点は、日中戦争時代の中国難民救済施設団の活動（1938年）に遡ります。その礎に戦争の贖罪があり、命を支えることを通じて平和を創り出すことを使命としています。

創立以来、延べ11カ国70名のワーカー（クリスチャンの医療従事者）を派遣し、現在はアジア・アフリカ5カ国に8名のワーカー派遣と延べ7カ国104名の現地医療従事者への奨学生支援を行っています。

ネパールでは家庭医が歩いて3日から1週間もかかる山岳村での地域医療を行い、看護師は受刑者の子どものホームの活動を行っています。一つの物語があります。かつて「ネパールの赤ひげ」と呼ばれたドクター岩村（1962年〜80年）は、医療キャラバン隊の岐路途中に重症患者のお婆さんと出会いました。すると通りすがりの青年がその患者を3日間背負って歩いてくれ、「サンガイ・ジウナコラギ（みんなで生きるために）」と、お礼を受け取らずに立ち去ったそうです。ネパールには絶対的な貧困の中、支え合い、助け合う豊かさがあるのです。日本には物質的な豊かさがある一方、人と人との「関係性の貧困」があります。「本当の豊かさ」とは何か、と考えさせられます。

カンボジアではかつて母子の命を守る伝統的な助産婦の教育訓練を農村で行っていました。今は看護師が性暴力やDV被害者の女性シェルターで、女性と幼子たちの命を支えています。心も体も深く傷ついた女性たちと共に泣き、共に喜ぶ毎日です。タンザニアでは助産師としての出産介助に加えて、HIV/AIDSの予防啓発活動を含む母子保健活動に従事しています。世界では1分に1人の女性が出産時に命を落としているのです。パキスタンで新生児・小児医療を担う小児科医は、人工呼



吸器の不足で守れるはずの命が救えない現実と直面し、日々祈りつつ活動しています。世界では約1000万人の子どものたちが5歳の誕生日を迎えられず、3秒に1人が天国へ、という現実があります。パングラデシユでは少数民族の居住地域に内科医を派遣し、理学療法士は地域に根ざしたりハビリテーション活動やスタッフの教育訓練に従事しています。また看護師は知的ハンディを持つメンバのホームで、知的ハンディに加え重い精神疾患や身体的な障がいを持つメンバと生活を共にしています。ホームのメンバの中には首都ダッカで、文字どおり裸でゴミ箱に捨てられていた子ども、野良犬と残飯を争って生きてきたストリートチルドレンもいます。その子どもたちの中に「イエス・キリスト」を見ます。私たちは「地の塩」、彼らは「世の光」なのです。

JOCSの使用済み切手運動は、1964年にネパールでの医療を支えるため日本で初めて始まりました。それは約15年前にドイツの町で、ある神父がてんかんを持つ路上に捨てられていた子どもたちの救

済から始まったとされています。最も貧しく弱く小さくされた子どもたちの命と向き合うことが物語の始まりです。それはイエスの生き方そのものでした。通信手段の激変によって切手運動は困難な時代を迎えていますが、その意味を今一度考えたいと思います。切手運動は、切手1枚とハサミ一本でできる国際協力です。その運動の面白さや教育的価値は、奥深いものがあります。

インドのクリスチャン・フェローシップ病院に「We Treat God Heals（私たちは治療をします。でも癒されるのは神様です）」という言葉が掲げられています。この「Treat」を「serve」あるいは「care」に置き換えてみてください。それは医療者ではない私たちにも、できることでしよう。

私たちは「無力」ではありません。一人ひとりの力は小さくささやかでも「何かできる存在」です。一人が二人になり、二人が三人に広がって、「貧困のない争いのない平和な世界」に変えていくことができます。この瞬間にも命の危機にさらされている人々の痛みを分かち合いながら、「みんな生きていきたい」と思います。

### 大江浩さん

1957年生まれ。神戸YMCAならびに横浜YMCAで、青少年活動や進路教育、国際交流・協力など幅広い分野で活躍。1995年の阪神大震災以降、アフガニスタン・インドネシア・新潟中越地震など、国内外の災害復興支援に従事。2006年4月からは、社団法人日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）の総主事を務める。

### 詩篇第133編1節

### わたしと聖句

見よ、兄弟が共に座っている。なんといい恵み、なんといい喜び。

日本福音ルーテル大江教会  
谷川 卓三

### 共に座す交わり

10月25日、私たちルーテル教会は熊本地区の諸教会・施設学校が合同で、宗教改革を記念して九州学院で記念行事を行いました。主日礼拝には350名ほどが集まりました。今年は神学校が熊本新屋敷のスタイルワルト宣教師宅で1909年9月27日に開校して以来100周年を記念して、一日神学校が熊本でも開催されました。当初のルーテル教会の歴史から今日のルーテル教会の宣教に至るまで4つの記念講座が行われ、最後に、神学校と教会を通して第二世紀の宣教に向けての派遣礼拝をもって、記念行事は終了しました。

日頃各所で分散している兄弟姉妹が一堂に会しての主日礼拝はそれだけで私たちに新たな力を与えてくれました。説教者として、九州ルーテル学院院長の清重尚弘師が宗教改革のメッセージとして「愛として働く信仰」と題し宗教改革の心からほとばしり出る宣教スピリットについて、教職と信徒への霊的遺言のごとく熱く語られたことは、会衆一同に大いに力づけとなったことだと思えます。